

自動起床装置



辺見 庸

芥川賞受賞作

かれは、涼しい面だちをした
「起こし名人」だった——

「眠り」という前人未到の領域を描き、現代文明の衰弱を衝く！

文藝春秋刊 定価1000円(本体971円)

自動起床裝置

辺見 庸



文藝春秋

自動起床装置

じどうきしょうそうち

一九九一年八月二十五日 第一刷
一九九一年八月三十日 第二刷

著者紹介

一九四四年宮城県生まれ。早稲田大学文学部卒業。一九七〇年、共同通信社に入社。横浜支局を経て一九七五年から外信部。北京特派員、ハノイ支局長などを歴任して現在外信部次長。一九七八年、中国報道で日本新聞協会賞を受賞した。一九九一年「文藝界」五月号に発表した「自動起床装置」によって第一〇五回芥川賞を受賞。ほかに作品として「ホテル・トンニヤットからの手紙」「異境風景列車」(いずれも「エスクアニア日本版」)に一九八九年から九一年にかけて連載)などがある。

著者 辺見庸

発行者 豊田健次

発行所 株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三一二三
電話代表(〇三)三二六五一二二一

印刷所 大日本印刷

製本所 大口製本

定価は、カバーに、表示されています
万一、落丁乱丁の場合はお取替致します

目次

自動起床装置

5

迷い旅

121

自動起床装置

カバー写真 姉崎一馬

(提供リネイチャーム・プロ)

装幀 森 玲子

口絵撮影 大東将人

自動起床装置

知らないひとに、どこか愉快な場所の話をするときには、いきなり扉を開けてその場所の中身をみせちゃだめだ。乗り物の話でもしながら、トコトコとすこしずつちかづいていく。それがコツなんだね。聴き手に時間があればだけれど、駅から、電車とかバスにいつしよにのつてもらうといいんだね。

ゼミの先生にいわれた。これから、ぼくもそうやって話しはじめようと思う……。駅から。

1

駅。

群れがすさまじい勢いで駆けおりてきた。

ド、ド、ドと不揃いな靴音がして、階段がギッシギッシ軋んだ。先頭集団には、「おう」とか「うつ」とか、威嚇ともうめきともつかぬ声を発するものもいて、構内が不穏な空気になる。今時分バスはもうない。人の群れは、駅前広場のタクシー乗り場をめざして

いる。

上りと下りのホームに階段が二つにわかれる踊り場にぼくはさしかかっていた。ひとのなだれは下り線ホームからおしよせてくる。なだれは熱をおびている。熱がにおいを勢いづかせる。酒、香水、汗、樟脳、大根おろし、こまつなのおひたし、ガーリック、ゴマだれ、インク、わきが、ヘアリキッド、ムース、紙埃、修正液、酸化した血……。においは、もわっと生温かい風になって、踊り場でわだかまってから、改札口に吹きおりていった。

上り線の階段をぼくは選ぶ。靴音が消えていく。背中が寒くなった。ホームから十二月の風がきて、顔をひんやり洗った。

電車が贅沢なほどひかりに飾られて、ぼくしかないホームにすべりこんできた。先頭にいるはずの運転士がいなかった。逆光でそうなるだけなのだけれど、この時間の上り線は、電車がひとりで走っていてもおかしくない気がしてしまう。客がほとんどいないものだから、大きな図体でひとり遊びしているようだ。オレンジ色の車体をいったん軽く揺すって、ブシューッと息を吐きだしてから静止する。

さあお乗りなさい。

二十いくつかのドアがすべて惜しげもなく口を開く。ひかりが溢れでてくる。だれもない車内に、ぼくは勿体ぶって足を踏み入れる。特別の招待客みたいに。

そうしたら、すでにだれかいた。皓皓とひかりを浴びて、老婆がひとり当然のように座っていた。小さくて、乾ききった種子のようだった。ホーム側に背をあずけていたが、頭が窓の底辺にやっとかかるかからないかの座高だった。

老婆の斜めむかいにぼくは席をとった。笑っているのか泣いているのかよくわからない顔がぼくをみた。視線がすぐぼくを突き抜けて、窓の外のネオンの果ての、遠い遠い闇にまで伸びていった。

地下鉄への乗り換え駅でぼくはおりた。老婆はおりなかった。

振りかえると、車内はまた無人にみえた。

いつも通り、地下鉄の先頭車両にのった。運転席と仕切ったドアに立ち、ガラス越しに進路をのぞく。レールの先に、これからぼくがいく夜がつながっている。線路に沿って、夜はくちなわの形にクネクネと漂っている。

闇のむこうに、小さなひかりの点がある。点は、深い眠りから覚めるときみたいにしてこ

しずつ光量を増して、ぼくの目のなかでいっぱいにくらんでいく。駅だ。

改札口にはだれもない。

ぼくは定期券を親指と人差し指でつまみ、無人の改札ブースにみせてやった。出勤なのだ。それなりのきまりきったあいさつがあつていい。

零時十五分前には着きたい。スニーカーが早足になる。二段飛びで地下階段を駆けあがつたら、いきなり氷のような月にであつた。

ビル街をいく。

どのビルも葉も枝も落とした黒い裸木にみえる。

十二階の屋上にアンテナをいくつも立てた、鈍色の壁のビルだけが威勢よく明かりをつけていた。その下で、ふっと息をつく。裏の夜間通用口にまわり、ぼくはダウンジャケットの胸にIDカードをつけた。

「東亜国際通信社臨時契約職員番号0075 水田 満 昭和43年9月27日生」。口を半開きにしてあいまいに笑っているぼくの顔が、ポケットからやや斜めにぶらさがった。

「こんばんは」

守衛事務所に声をかけると、ガラス窓のむこうで宿直の佐藤惣之介さんが週刊誌から太った赤ら顔をあげ、右手をだるそうに振った。まぶたが腫れて、もう眠そうな目になっている。恰幅のいいひとだ。

一度帰りがいっしょになり、ぼくとバイト仲間の小野寺聡に駅前の牛丼をごちそうしてくれたことがある。惣之介さんは、心臓悪くてなあ、といいながら、無料の紅生姜を、牛肉も玉ねぎもご飯もみえなくなるほどいっぱいにかけて食べた。惣之介さんを見ると、いつも真っ赤になった牛丼を思いだしてしまう。

振りかえると、惣之介さんはまた週刊誌に目を落としていた。重そうな頭が下に垂れている。紺の制服のりっぱな肩だけ目立つから、首なし男が座っているようだ。

だれもいないエレベーターにのる。

「ドアーガシマリマス。ウエニマイリマス」

鉄の板に隠されたスピーカーから、昼も夜もなく元気な女の声が流れる。

「ヨンカイデス」

この声に反応して、ぼくの筋肉が硬くなる。これからぼくの夜が始まろうとしているの

だ。

銀色のドアが開いた。エレベーターホールの壁を背に、横一線に整列したスチールロッカーたちが直立不動でぼくを迎えた。腕時計は、零時十四分前だった。

遅番の仕事は零時からだけれど、その前にぼくとチームを組んでいる十時出の早番からその夜の様子を聞いておくと、あとであわてなくてすむ。

シャリシャリ、シャシャー……。

シャリシャリ、シャシャー……。

このビルにはいつもなにかが遠慮がちにこすれるような音がしている。ひとつでなく、たくさん乾ききったものたちが間断なくなにかしている音である。最初に聞いたときは、なん万匹もの虫がいつせいに葉を噛んだらこんな音になるかもしれないと想像した。

正体をみたことはないが、ファクシミリやコンピュータやニューズティッカーの音なのかもしれない。それは、エレベーターや階段や壁を伝って四階の廊下にも砂のようにこぼれでてくる。

「総合管理部深夜職員控え室」のプレートをつけたページジュのドアを開けた。

アメ色の縁の眼鏡をかけた、色白の痩せた男が、事務机で本を読んでいた。緑色のセーターの背中をつの字になるほど折り曲げて。早番の小野寺聡。かれと週三日、月、水、金といっしょにはたらいっている。

聡をはじめてみたらだれだって、ひどく度のつよいアメ色の眼鏡を、なんだ年寄りくさいと思うにちがいない。それと、いやに赤い唇にとまどうかもしれない。アンバランスなのだ。

が、二か月もつきあったら、聡というのは精子のときからアメ色の眼鏡をかけ赤い唇をしてチョロチョロ泳いでいたのだろう、と思えてきた。似合ってもいるのだ。

よくみるとすぐハンサムなのだ。鼻がツンと尖っていて涼しい面だちをしている。が、首が細い。その分、頭が大きくみえる。

こいつはこどものころクラスでずいぶんいじめられたろうな、というのがぼくの第一印象だった。色白で首の細い生徒はまちがいにないじめにあう。でも、しばらくつきあったら、聡というのは、いじめからもしじけることから、いつかどこかでスコーンと上手に抜けてた男に思えてきた。静かで、なににつけあわてるといことがないから、ぼくと同

い年なのに五つも年長にみえてくる。だから妙に張り合いたくなるときもあった。

法学部の三年生だというけれど、聡が法律の専門書を手にしているのを見たことがない。いつも「樹木」とか「眠り」にかんする本を読んでいる。

聡の肩ごしに、カラー刷りの本の挿絵がみえた。

南の国のものらしい大木だった。ぎっしり葉をつけているが、鬱蒼というのでなく、どこか猛々しい木にみえる。

太い枝から灰褐色のものがいく筋も垂れさがっている。ロープにも、牛のよだれにもみえる。

よだれのようなもののなかには大地に達しているものもある。それらは根づいているらしく、まだ地上にぶらさがっているのよりよほど太くなっている。よだれが、もともとの幹のまわりにいくつも新しい幹をこしらえているようだ。新しい幹も枝を生やしはじめている。その枝が、またなん本もよだれのようなものをブルーブラと垂らして、それらがいつか地につくことを暗示しているから、挿絵の樹木は古い幹のまわりにいつまでも終わら